

平成 29 年度

第 14 回 東京都高等学校体育連盟研究大会



【 講 演 】

「オリンピックと嘉納治五郎」

真田 久

筑波大学体育専門学群長

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長

司会)

それでは定刻となりましたので始めさせていただきます。はじめに、開式の辞を、庄司一也東京都高等学校体育連盟研究部部長が行います。

庄司)

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました、東京都高体連研究部長、都立晴海総合高等学校長、庄司です。過日、学習指導要領案が提示され、学び方についても、もう一度しっかりと考え直す機会を持ちました。子供達がどのように主体的に、そして、対話的に深く学び、「分かった」という気づきをさせるかということを実現させなければなりません。新学習指導要領に沿った教育課程を考える一方で、働き方改革も具現化しなくてはなりません。そのような中で、部活動についても同様に在り方から考える必要があるという大きな課題を今、突きつけられています。現在、韓国の平昌では、男子フィギュアスケートで、羽生結弦選手が連続の優勝、第2位に宇野選手という、嬉しいニュースも飛び込んで来ています。高校生の年代の選手が活躍していることも嬉しく思います。高校生アスリートが世界と戦える努力に、敬意を表したいと思います。そのような中で、本日はご講演で近代オリンピック等のご研究の第一人者の真田先生からオリンピックムーブメントについてご講話をいただきます。また、全国大会の報告4点は、楽しい報告になると思います。この報告の後、競技力向上として、陸上専門部から東京五輪出場目指しての取り組み、また、健康・安全から、水泳の事故防止について水泳専門部からの発表があります。私共研究部は、皆様と共に生徒の健全育成について、部活動のあり方を含め、共に考えていく会にしたいと考えています。ただ今から、平成29年度第14回、東京都高等学校体育連盟研究大会を開催いたします。どうぞよろしく願いいたします。

司会)

会長挨拶、東京都高等学校体育連盟、久保淳会長よりご挨拶申し上げます。

久保)

みなさんこんにちは。今日は研究大会、みなさんお集まりいただき本当にありがとうございます。原稿を作ってきましたので、読ませていただきます。平成29年度第14回、東京都高等学校体育連盟研究大会が、研究部を中心に各競技専門部のみなさまのご協力と関係者の方々のご支援により開催できますことを心より感謝申し上げます。本連盟は競技力向上と研究を両輪と捉えて活動しており、この研究大会は東京都高等学校体育連盟に加盟する各専門部の体育スポーツ指導者の資質向上を図ることを目的としています。今年度は競技力向上、健

康と安全、の2分科のテーマについて発表が行われます。また、この1月に島根県で実施された全国高等学校体育連盟研究大会の報告も行われます。これらの研究発表が高等学校教育の一環としての体育の振興発展に資するものとなりますことを期待しています。さて、昨年の夏、平成29年度全国高等学校総合体育大会が山形県を中心にした4県において開催されました。各専門部の先生方のご尽力のおかげで、無事終了致しました。東京勢の活躍も素晴らしく、陸上競技をはじめ8競技種目で優勝者を出すことが出来ました。その他の競技においてもチーム東京を合言葉に選手一人一人が最高のパフォーマンスを発揮してくれました。これもひとえに、各専門部の先生方の熱い情熱や深い愛情によるご指導の賜物と感謝申し上げます。本当にありがとうございました。いよいよ、東京オリンピック・パラリンピックが2年半後に迫ってきました。奇しくも、今現在、韓国平昌で冬季オリンピック・パラリンピックが開催されています。日本人選手の活躍に胸を踊らされる毎日です。このような感動がこの日本で、この東京で生まれるかと想像すると、今からワクワクする思いでいっぱいです。東京オリンピック・パラリンピック開催に向け様々な課題があると思われませんが、この東京都高体連の先生方が高校スポーツの指導者として、また高等学校の教育者として、積極的に関わり、様々な形で高校生の健全な成長に寄与していくことを切に望んでいます。また、昨年度来、課題となっている2020年のインターハイ問題ですが、全国高体連事務局を中心に全国の高体連関係者の尽力により、徐々に解決の方向に向かっていきます。しかしながら、まだまだ課題はあり、今後とも皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。さらに今、全国的に中学校、高等学校の部活動のあり方が注目されており、教員側と生徒側の両方の側面から課題が指摘されています。中高生の体力面だけでなく、人間形成においても大きく関与してきた部活動でもありますが、そのあり方や活動内容など、東京都高体連としても今一度変えていく必要はあると思っています。本研究大会の開催に向け、ご尽力いただきました研究部をはじめ、関係専門部の皆様や会場を提供していただいております目白大学、多くの関係者の方々に感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

司会)

教育委員会祝辞 東京都教育庁指導部 体育健康教育担当課長 佐藤浩様より
ご祝辞をいただきます。

佐藤)

平成29年度東京都高等学校体育連盟研究大会がここ目白大学において盛大に開催されますことを、東京都教育委員会を代表して心よりお祝い申し上げます。

日頃より東京都高等学校体育連盟各専門部及び関係者の皆様には、運動部活動の指導に加え、各種の大会運営や様々な研究活動にご尽力いただいていることに心より敬意を表します。スポーツは世界共通の文化であり、明るく豊かで活力に満ちた社会には欠かせません。特に、人間形成の過程にある高校生にとっては部活動を通して、自己やチームの目標に向かって切磋琢磨することは豊かな人間関係の構築などを高める機会となると共に、体力の向上や健康の増進にも極めて効果的な活動になります。東京都教育委員会は部活動の教育的意義を踏まえ、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて高等学校体育連盟各専門部の皆様とより連携を深め、様々な取り組みを進めて参ります。さて、今年度は学校における働き方改革に関する対策について多くの議論がなされています。一部の中学校、高等学校における部活動においても適切な休養を伴わない、行き過ぎた活動が行われているということが問題として取り上げられており、今後これまで以上に、スポーツ医科学的な知見に基づいたより高度な指導が求められてきます。本研究大会における発表においてもこうした課題を踏まえ、今後の運動部活動の進むべき方向性を示していただけることを期待しています。本日発表していただきます先生方には、これまでの実践はもとより、本日の研究発表の準備においてもご尽力いただき誠にありがとうございます。本日の成果を広く周知していただき、有効に活用されることを願っています。結びに、関係者の皆様のご健康と東京都高等学校体育連盟の益々の発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。平成30年、2月17日、東京都教育委員会。

司会)

元東京都高等学校体育連盟会長 山崎正己様よりご祝辞をいただきます。

山崎)

ただいまご紹介に預かりました、山崎です。日頃、先生方には高体連のために大変お時間を割いていただきまして、様々な角度からご支援いただき大変ありがたいと思っています。様々な教科の先生方に多数ご参加いただいている高体連ですが、私は保健体育の教員でしたが、本当に私共、東京都高体連としてありがたいと思っています。今日はまた、筑波大学の真田先生からオリンピック、嘉納治五郎先生を中心にもお話しいただけるようです。オリンピックは、やはり大きな狙いとして文化交流というものがあろうかと思えます。そして今、私たちがこのような形で研究大会の中で、競技力向上であるとか、部活動の推進、活性化並びに健康安全というところを踏まえて研究をしていただいているということは、大変重要な視点ではないかと日頃から考えています。ぜひこの視点

を広めていただきながらお互いの充実に、また、日本の運動文化の充実に先生方のお力添えをいただければありがたいと思います。今日は私も勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

司会)

東京都高等学校体育連盟 奥秋將史理事長より本日ご臨席いただきました皆様をご紹介いたします。

奥秋)

それでははじめに、

東京都教育庁指導部体育健康教育担当課長 佐藤浩様

元東京都高等学校体育連盟会長 柿添賢之様

元東京都高等学校体育連盟会長 山崎正己様

以上でございます。

司会)

続いて講演に移らせていただきます。東京都高等学校体育連盟庄司一也研究部部長より講演者の紹介をさせていただきます。

庄司)

私から真田先生のご紹介をさせていただきます。お手元の研究大会紀要の4ページをお開きください。真田先生は1979年、筑波大学体育専門学群を卒業後、1981年大学院を修了され、現在筑波大学体育系教授、体育専門学群長、博士であり、古代及び近現代オリンピック史や嘉納治五郎先生に関する研究に従事されています。詳しくは紀要をご覧くださいたく思います。時間も限られているため先生からの発表をできるだけ長く少しでも聞きたいと思います。加えてもう1枚プリントがございますが、1番上にクーベルタン、嘉納ユースフォーラム2017実施要項改案という両面刷りのプリントがあると思います。この研究部の事業で生徒対象の新しい取り組みですが、真田先生には、3月11日日曜日にも、オリンピック・パラリンピック競技にからめ、研究部としてこのよう事業を考えおり、ここでもご講話をいただくことになっています。この件につきましては、会が終わったところで各専門部の代表の方にお残りいただいたところでご説明させていただきます。では、真田先生、ご講演よろしく願いいたします。

真田)

皆さまこんにちは。ただいま紹介に預かりました筑波大学の真田です。今日

はこのような研究部会にお招きいただきまして大変光栄に思います。私は東京都の都立高校の卒業で、このように高体連の皆様がいろんな活動をされていることを嬉しく思っている一人です。今日は、日本のオリンピックムーブメントの歴史ということで嘉納治五郎先生のことを中心に、お話をさせて頂きたい。柔道では有名だが、実はオリンピックムーブメントを創設し、そして長く世界のオリンピックムーブメントを牽引した方でもある。そのことを紹介させて頂きたい。嘉納先生は次のような経歴である。1860年に神戸に生まれ、その後、東京に出て、東京帝国大学を卒業した直後、講道館柔道を創設した。そして1909年には国際オリンピック委員会（IOC）委員に日本人初、またこれはアジア人初で就任した。そして1911年には、そのオリンピックに選手を派遣するための母体として大日本体育協会、合わせてこれは、国民スポーツを日本全国に広めようという思いで作られた組織であった。生涯スポーツとトップアスリート、この両面の育成を考えて作られたのが大日本体育協会である。そして翌年には団長として初めてのオリンピックに選手2名を連れて参加した。1912年のことであった。36年には、1940年の大会の開催地に東京が選ばれるが、それに対して大変な努力をされた。2年後に77歳でICO総会からの帰りに、船上で横浜に到着する2日前に亡くなり、後半生はオリンピックムーブメントに捧げた。

このIOC委員嘉納治五郎に対して、1年半前にIOC会長を筑波大学に招待し、その時の講演の中で、このように嘉納治五郎について述べて頂いた。トーマスバウハ会長が、嘉納IOC委員はIOCの創設者クーベルタンと同様にスポーツを教育に欠かせないものとして実践をされた、非常に重要な人物であると講演して頂いた。今日、日本では、体育の授業あるいは部活動というものがあるが、まさにそれらは、スポーツと教育を、融合させた姿として認識をされているということである。IOC会長だけではなく、IPC会長、パラリンピック委員会の会長も、1年半前の組織委員会の会合で、日本には嘉納治五郎という人物がいて、彼は年齢、性、国籍の違いを越えて、体育・スポーツを実践された人物であり、氏は他者への尊敬というオリンピック理念の哲学を持っていた、それは現在の教育プログラム、IOC、IPCのプログラムに継承されているし、これからも継承されなければいけないということを述べて頂いた。IOC会長とIPC会長お二人が、嘉納治五郎のことについて賞賛をしてくれたということで、この点からしても、どういう人物で何をしたのかということをしつかりと伝えなければいけないと思う。

日本のオリンピックムーブメントの始まりは、1908年、クーベルタンが、日本に駐在しているフランス大使、ジェラルドに対して日本からは是非IOC委員を出してもらいたい、その人物を推薦してもらいたいという要請をし、そこから始まった。そこでジェラルドは、色々な情報を集めたところ、これは嘉納治五

郎という人がふさわしい、ということで連絡を取り、二人が1909年1月に会った。そこでどういう話しがあったのかということは、その後にジェラルドからクーベルタンに手紙が送られていて、その手紙の中を読むと、その内容、話された内容がわかる。ジェラルドは、柔道、水泳、体育の業績で著名な東京高等師範学校の校長で柔術学院創設者嘉納氏、これは講道館のことで、嘉納氏はIOCの任務について受け入れたいと表明した。彼は1889年にフランス、イギリス、ドイツを訪れ、正確な英語を話す。IOCの目的を日本に広めるとともに日本のスポーツの報告書を貴殿に送付される。このような書簡を送っている。嘉納治五郎はすぐにIOC委員の承諾をしたということ、IOCの考えにも賛同したということ、そして正確な英語を話すということ、さらには、日本のスポーツの報告書を送ると、これが嘉納治五郎らしいところで、単にヨーロッパの文化を受け入れるだけではなく、日本にも元々スポーツに相当するものはあると、そのことをきちんと報告するというのを、述べている。この点は大事な点である。そして当時の嘉納治五郎の役職を見ると、講道館長、そして東京高等師範学校の校長、これも1893年から行い十数年間も経っている。それから、宏文学院、これは留学生を受け入れる学校である。当時、中国からたくさんの留学生が日本にきている。最初に受け入れた人物が、嘉納治五郎である。中国は日本に学んで近代化を成功させたいということで、優秀な学生を送った。こうは言っても、すぐに日本の学校に入れると、ついていくのが難しいため、留学生を日本の学校に適應できるように教育する学校、これが、嘉納治五郎が作った宏文学院である。この学校を経て、優秀な生徒は東京高等師範学校、あるいは色々な大学、明治大学など様々な大学に巣立った。この宏文学院の中でも、嘉納治五郎、体育やスポーツを行っている。柔道を行い、それからボートレースに出場させ、運動会、年に2回運動会行い、そこに参加させた。彼らは初めて日本に来て、体育やスポーツを経験する、そして運動部も作り、テニス、長距離走、それから柔道、こうしたものを行って、彼らは国に帰った。その中に、例えばこの范源廉という人は、中国に戻った後に、文部大臣に3回なる。さらに北京師範大の学長になり、正に中華民国の教育制度を作り上げていく、このような人が出ている。留学生に体育スポーツを行わせ、日本人学生と交流をさせる。そこで色々な交流が行われた。部活動での交流、例えば、蹴球部、サッカーでは、留学生チームが東京高等師範学校で作られ、彼らが他の師範学校と定期戦を行う。当時、朝鮮半島から来ていた学生と、中国の留学生と日本の学生が国際試合を行い、すでにIOC委員になる以前に嘉納治五郎は東京で国際試合を行い、交流を行なっていて、その成果をきちんと認識していた。そのことが一つの要因でオリンピックの理念にすぐに賛同し、IOC委員の就任を引き受けることになったと思う。就任してから、まず大日本体育協会を創った。国民体育、

国民スポーツの振興を掲げるが、1912年のストックホルムオリンピック、ここに選手の派遣を行なっていく。自ら団長として参加し、これが日本人最初のオリンピック参加ということである。さらに1915年、東京高等師範学校の体育科を作った。これは初めての体育科である。それまでは体操科であった。体育科になり何が変わったかと言うと、それまで体操科は3年で教員免許が取れる、それを4年にした。いろんな学問体系を作り上げた。心理学、教育学、英語、歴史学、などを入れ、体育学を作り、4年を経て教員免許を取得させる。4年の教員免許、これで他の教科と同等になった。それによって、いわゆる体育の教師の社会的な地位が非常に引き上げられていったということである。現代では、小中高、体育の授業必修になっているが、こういう国は実は非常に珍しいものである。世界でも数えるほどしか実はない。日本は、100年以上前からそのシステムが作られていたということである。

その後、1920年のオリンピックで、テニスで銀メダルを日本人が取った。1923年、関東大震災が起こる。東京が火の海となる。木造建築で、しかもちょうど正午に地震が起こったため、たちまち火災が起こり、10万人が亡くなるという大変な惨劇になった。翌年、パリでオリンピックが開かれた。それに対し、当時の世論はこういう時にオリンピックに派遣するべきではないという意見が強かったが、嘉納治五郎は「こういう時だからこそ、日本が震災に負けていないという姿を世界に示すべきである。」と。そして、参加を決定する。それにアスリートが応える。織田幹雄、内藤克彦、レスリング銅メダル、そして、やはりオリンピックの花形スポーツであった陸上で織田幹雄が三段跳びで6位入賞。高石勝男が100m、1500m、自由形で5位入賞、800mリレーでも第4位と、水泳と陸上で入賞する。これは実は大変なことであった。当時の新聞でも日本のスポーツの歴史に刻まれる大変な出来事であったと書かれている。同時に、スポーツ公園が作られる。明治神宮外苑の競技場、スポーツ公園である。国立競技場があったところ、今は新国立になりつつあるが、実はあそこも、嘉納治五郎が競技場を作ったらよろしい、年に1回日本各地から優秀な選手を集めてスポーツの大会を行う、ということを提案して作られた競技場であった。その競技場をモデルとして、1930年になってから、隅田公園、浜町公園、錦糸公園ができた。今でも隅田川の両サイドに、公園があり、花火大会等が行われているが、スポーツ公園である。関東大震災の直後に、東京市と日本政府が考えて、下町に避難ができる施設として公園を作ろうということが決められた。それに対し、嘉納治五郎が、どうせ作るなら、競技施設を作った方がいいということ、議会に建議を出す。それを当時の復興大臣後藤新平が、受け入れて、これら3大公園にスポーツ施設を作った。そのスポーツ施設で、一般の市民が思う存分スポーツできるようになった。それまでは学校でしかする場所がなかった

が、公共の公園で、スポーツができるようになる、50mのプールも作られ、ナイターまで完備され、そこで一般の市民が泳ぐ、野球場も作られる、まさに市民スポーツが盛んになった。これも、実は、関東大震災の復興の中で行われていた。ということは、復興にはスポーツが役に立つということを示した、ということでもある。

一方、アスリートも応えた。1928年には、織田幹雄が金メダルを取る。陸上競技 800mでも女子、人見絹枝が銀メダル、そして、平泳ぎで鶴田義行が金メダル。もしも24年のパリ大会に出ていなければ、このようなことは起こらなかったと思う。織田幹雄は自分が書いた著書の中で、24年のパリ大会で、3番手に入れなかった。次のオリンピックでは表彰台も夢ではない、と実感をしたと述べており、24年のパリ大会への出場は、大きな成功に繋がったということである。32年も水泳5種目で金メダル、三番の時にも、南部が金メダル。こうやってアスリートたちが活躍した。こういう中で、東京でオリンピックを開催しようという運動になっていった。しかし、1930年代の日本の状況を考えると、オリンピックでは非常に活躍をしてきたが、当時はヨーロッパから日本に来る手段、これは、船と鉄道である。船で、スエズ運河を渡って南アジアを通過し、東南アジアから日本に入る、2週間以上かかる。もう1つは、モスクワをぬけて、モスクワからシベリア鉄道に乗り、10日間同じ景色を見ながら移動する。ハバロフスクに到着し、日本にわたってくると、どちらも2週間以上かかった。このような時に、ヨーロッパの選手に対し、東京にやっ来てと言おう。当然、ヨーロッパの人たちは反対した。また、1933年の3月に日本は満州国の問題で、国際連盟脱退を表明する。そういう世界の孤児になりつつあった中で、東京への招致活動が行われた。嘉納の招致活動はどのようなものであったかというのと、31年に東京招請が決まり、翌年のロサンゼルスオリンピックでのIOC総会で、嘉納治五郎自ら、IOCの会長、ベルギーのラトゥールという人に、招請状を受け渡した。これが招請状である。髭次郎という東京市長が、IOC会長へ当たった、招請状である。そして33年の6月に、ウィーンのIOC総会で、杉村陽太郎という人をIOCに就任させた。3人目である。そこで、実行委員会を設置し、35年のアテネの総会では、日本の写真集、「東洋のスポーツの中心地、東京」という写真集を配布し、日本にはこういう競技施設もあるし、一般の人のスポーツも盛んにおこなわれていることをアピールした。32年には、招致活動の一環として、日本の夕べ、世界から集まってきているスポーツの関係者、またIOC関係者を招待した。

IOCに嘉納治五郎の推薦で入った杉村陽太郎、この人物がのちに大活躍する。高等師範学校の附属中出身で、当時の校長は嘉納治五郎である。また、講道館にも入門し、5段まで取っている。嘉納の弟子であったということはこれで明

らかであるが、東京帝国大学を卒業した後、外務省に入り外交官になる。フランスにも留学し、フランス語で博士号を取り、フランス語が非常に堪能な人物となる。その論文の内容は「いかに国際平和を確立するか」ということで、そのことが評価され、27年には国連の事務局長になる、そういう人物であった。この写真でわかるように、パリで休日になると、近くの教室で柔道を教えていた、ということであった。面白いことに、IOCに、これは副島道正という人物で、学習院を卒業し、学習院に入った時の教頭は、実は嘉納治五郎であった。彼はその後、イギリスケンブリッジ大学に入学し、英語が非常に堪能で、イギリスとのネットワーク、杉村陽太郎はフランス語が堪能で、フランスとのネットワークを作った。また、嘉納を支えた政治家も多い。浜口首相である。首相にも3人、若槻首相と、広田首相も実は、嘉納治五郎の弟子であった。講道館柔道に入門している。さらに海軍大臣、海軍・陸軍の部署にもおり、彼らも、嘉納治五郎を支え、嘉納治五郎の教えをもとに、様々なことを行っていたということもわかっている。

ところで、1940年の開催の一番の強敵はローマであった。ローマにはすでに10万人収容の競技場ができ、ヨーロッパであるため、非常に強敵であった。しかし、嘉納治五郎はこのときに、IOCの委員会で、こういうことを言っている。ローマは強敵であるが、ムッソリーニはすごい人であるため、わけを話して、譲るといえば譲るかもしれぬ、とこういう発言をしていた。これを聞いた杉村と副島が、ムッソリーニに直談判しに行く。そして、1940年、歴史から考えると、ちょうど2600年になる、と。このときに限り、ローマは辞退していただきたい。ということをもッソリーニに直接話をした。そしたらなんと、ムッソリーニが分かりましたと。日本国民のためにローマは取り下げましょう、ということになった。これが非常に大きな、東京招致への引き金となっていく。また、一方で、IOC委員の説得である。嘉納治五郎の説は、近代オリンピックは、古代オリンピックがギリシャに限られていて、それを世界のオリンピックにするために、クーベルタンは開いたのだ、と。今日だけでは欧米だけの文化であって、東京で行ってこそ世界の文化になる、ということをも主張する。これに対してIOCは、やはりごもつともだと、ということになる。さらに、投票直前の嘉納の発言であるが、オリンピックは当然日本に来るにも関わらず、来なければ、正当な理由が退けられたことに違いない。それならば、日本から欧州への参加も、遠距離であるから出場するに及ばないということになる。そのときは、日本は世界的な大会を開催してもよかろう。これは、日本が選ばれないということは、IOCが正当な理由を退けたということになるので、日本が、オリンピックに匹敵する、もしくはそれ以上の大会を開いて見せる、ある意味脅しである。ということをも嘉納は述べて、そして、その時に36対27票で、東京が勝利をす

るということになった。嘉納治五郎の確信である。東京で開かれるべきであるという、この考えが、賛同を得たということである。この招致が決まった直後、嘉納は、オリンピックを世界の文化にしなければならないということを述べている。「27年間の苦心、ようやく実を結ぶ、大日本体育協会名誉会長 嘉納治五郎」としている。そして、東京招致が決定した。クーベルタンも実は、東京招致に期待を寄せていた。東京で、オリンピックが開催されることで、ヨーロッパ文化の基礎であるヘレニズム、ギリシャの文化を基調とした考え方であるが、これらが、アジアの洗練された文化と混じり合うことが大切なのだ、ということをして37年の7月に彼は述べている。実はこの手記は、彼が最後に書き残したメッセージである。この1ヶ月半後に彼はなくなってしまうが、近代オリンピックを創設したクーベルタンが書いたことは、東京大会への期待であった、ということである。これはまさに嘉納治五郎と同じ考えを持っていたということである。しかし、その後の日本と中国との戦争、これが激しさを増していく。そういう中で、国際世論も、東京で本当にできるのだろうか、難しいのではないかと、東京を断念させた方がいいのではないかと、という思惑が広がり、そうするためのIOC総会が38年、カイロで開かれる。日本から誰が行くのか、ということになり、それを引き受けたのが、嘉納治五郎であった。当時もう77歳である。嘉納治五郎が来て、彼がどういう演説をしたかと言うと、「スポーツは政治に干渉すべきではない。」と彼は、述べ、東京オリンピックを引き下げることに対して誰も賛成しなかったということであった。さらに、40年には東京大会のみならず、札幌での冬季のオリンピック、これも決定した。ということで、これはひとえに、IOC委員、嘉納治五郎に対する尊敬の念、尊敬の表れでもあったということがいえる。

そして嘉納は、その後ヨーロッパを周り、ヨーロッパのIOC委員にお礼を言い、さらにはアメリカのIOC委員にお礼を言い、アメリカまで渡る。そして、ブランデー、アメリカのオリンピックの会長に会い、東京大会への協力を、約束をとりつける。そして、バンクーバーから氷川丸に乗って横浜に向かった。5月に入って肺炎を起こし、そして5月4日に、洋上で亡くなる。横浜港への到着が5月6日、2日前に嘉納治五郎は息を引き取った。それに対してアメリカの新聞では、「マラトンの勇者のようであった」と書かれた。マラトンの勇者とは、古代のペルシャとギリシャとの戦争でマラトンからアテネまで走って、我々は勝ったと伝えるやいなや亡くなったギリシャの勇者のことであるが、それに例えられて嘉納治五郎について報道された。葬儀が行われ、亡くなった嘉納に対して、IOCが追悼のメッセージを送っている。IOC会長は、「嘉納氏は真の教育者であった。師の思い出を長く、座右の銘として忘れない、東京オリンピックこそ日本のスポーツを引き上げた師の労苦に対する報酬であったのだ。」IOCか

ら嘉納治五郎に対するプレゼントだったということを述べている。フランスのオリンピック委員の会長は「日本国民は師の真摯で勇敢な努力に深く感謝しなければならない。」また、36年の、ベルリン大会の事務総長であったカール・ディエム、「師は世界でまれにみるスポーツ教育の総合的人格者であった。」またブランデーは、アメリカのオリンピック委員会会長、「立派な侍であり、典型的な教育家であった。」イギリスのオリンピック委員会は「師の意志に従い日本におけるオリンピック教育を支えることを最大の幸福と考える。」と、このようなメッセージが送られた。これをみても、IOC から嘉納治五郎は信頼と尊敬を受けていたかということがわかる。そして嘉納が亡くなった後、日本は急激に軍部の主戦派が力を増す。嘉納治五郎を中心とした、実は、和平派のネットワークがあったが、その勢力が嘉納の死後なくなり、主戦派が伸び、2か月後に東京大会を返上する決定をする。

戦後に飛ぶが、1959年、また東京が招致に乗り出した。ミュンヘンでのIOC総会、ここで元外交官平沢和重が招致演説をした。実は平沢和重は、氷川丸に乗ってバンクーバーから横浜に向かった嘉納と一緒に乗船していた日本人であった。毎晩、嘉納治五郎と一緒に夕食を食べて東京オリンピックの話聞いた。そういう人物であり、平沢は、これだけの先生が東京オリンピックを熱く語ったため、「欧米をあっと言わせるような大会を開いてもらいたい。」というメッセージを残している。その21年後、彼はミュンヘンで招致演説を行うが、実はこれは突然決まったことであった。それまでは外務省の人が行う予定であったが、その人が、外務省の運動会でリレーに出場し、そこで転んで骨折をしてしまった。松葉杖をついて招致演説をすることはどうかということになり、急遽、会議の1週間前に平沢和重に白羽の矢が立てられたということである。彼は、日本では学校の授業で生徒が皆オリンピックを学んでいる、開催の準備ができている、ということ述べて、簡潔に短く話した。その教科書がこれである。小学校6年生の国語の教科書に載っている『五輪の旗』というエッセイである。「オリンピック、オリンピック、こう聞いただけでも私たちの心はおどります。全世界からスポーツの代表がそれぞれの国旗をかざして集まるのです。オリンピックこそはまことに世界最大の平和の祭典とすることができるでしょう。」ということを読み、日本ではオリンピック開催の準備ができている、子供たちはみんな学んでいるという、今でいうとオリンピック教育は行われているということ話した。その演説が素晴らしかったということで東京が見事勝利する。彼の演説がよかったといわれたが、平沢和重は、そうではなく、この時に自分のスピーチが終わるやいなや、嘉納治五郎との思い出をたくさんの人が語っていた、と。嘉納治五郎によって東京大会の決定はすでに決められていたのだ、と述べている。

同時に、柔道がオリンピック種目になった。これもまさに嘉納治五郎に対する弟子たちの祝福といえる。これは53年、嘉納2世、当時のIJF、国際柔道連盟会長が推薦したが、IOC理事会では拒否されてしまった。種目数を削減するという流れがあった。また、国際的に柔道はまだ新しいのではないか。参加国も少ないということで却下されてしまうが、その後、フランスのIOC委員が立ち上がる。柔道を加えるべきであると言うが、1955年ではまだ新種目の追加はない。しかしその後1960年に、IJFが再申請した時にヨーロッパの関係者がオリンピック種目に乗り出す。そしてIOC事務局長が、非常に協力的になり、そしてオリンピックの真の国際化の象徴として、柔道つまり日本のスポーツ、アジアのスポーツをオリンピック種目に入れる。これはまさに国際化にふさわしいという理由を述べて、39対2票で圧倒的承認を得ることになる。東京大会では、オランダのアントン・ヘーシクが、無差別で金メダルを取り、日本人だけがオリンピックで金メダルを独占しなかったということで、柔道は国際的なスポーツ種目にふさわしいと、その後も（1968年メキシコ大会は間に合わなかったが）、オリンピック種目になる。嘉納治五郎の思いは、継承され、2016年のリオデジャネイロでのオリンピックでは、ブラジルの女性が金メダルを取った。柔道57キロ級、この人はラファエラ・シルバさんという方であるが、ファベラという貧困で、犯罪が多発している地域で生まれ育ち、様々なことに手を染めたが、柔道の道に入り、そこから更生し、オリンピック選手になり、見事金メダルをとった、という人である。この時にブラジルの新聞では、これは日本のスポーツである柔道が勝利したというように書かれ、嘉納治五郎先生の教えが大きく紹介された。それからノーベル化学賞をとった野依良治さん、中高時代柔道部に入り、柔道で培ったことが、その後の研究などに活かされたということを述べている。

今日、国際柔道連盟では、明確に柔道の定義として、嘉納治五郎先生によって作られたものが柔道である、教育的な方法として1964年にオリンピック競技に定められたと書かれている。これは筑波大学の附属高校の資料であるが、「心身の力をよく応用する。これを柔道という」、嘉納治五郎が直々に書いた書が残されている。そういう嘉納治五郎IOC委員、その思いというものを考え、様々な業績を残し、簡単に言うと、体育やスポーツ活動は、これは万人に価値がある、年齢に関係なく、性別に関係なく。そしてさらに嘉納の言葉では、運動の上手い下手に関係なく万人に価値があることを一貫して述べ、一貫して行動している。女性にもスポーツを奨励し、留学生にも奨励し、つなげた。今日多様性の重要さが言われている、そういう多様性、要するに体育・スポーツが多様な人々に対して価値がある。1908年に、東京高等師範の附属小学校に特別学級を作っている。当時の校長は嘉納治五郎であるが、その時に、体育を中心とし

た特別教育、知的障害の生徒を対象として行っている。週に6時間から7時間の体育の授業を行い、社会に出ていかに適応できるかということをも身につけさせる。そのためには、体育あるいはスポーツが非常によろしいということでもれを取り入れて行なっている。そういう意味で今日、学ぶべき点が多いだろうと思う。最後に、嘉納治五郎先生のDVDを観たいと思う。

DVD鑑賞

はい、では時間になりましたので以上で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

司会)

真田先生、ありがとうございました。せっかくですので時間もありますので質疑の時間を取りたいのですが、何かご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。ぜひお願いします。いかがでしょうか。よろしいですか。それでは、東京都高等学校体育連盟、庄司一也研究部部長より謝辞を申し上げます。

庄司)

真田先生、どうもありがとうございました。個人的な感想ですが、階段教室で大学の講義を聞いているような、大学生の様な気持ちで参加させていただきました。ありがとうございました。やはり、ここにいる先生方は体育ということだけでなく、教科を越えて子供達に心と技を高め合うということをも、スポーツを通して、部活動を通して行っています。その先に、先ほど表彰をもらった生徒も、もしかしたら2020東京大会に参加する生徒もいるかもしれません。そのベースにはクーベルタンの考えがあり、それを日本に招致して広げた嘉納先生の考えがあると、これは今も生きていく上で大事なことで先生のご講義を聞いて、身に染みてわかりました。これを我々は指導者として、今後、今の子供達にどの様に伝えていくか、そして、さらに日本のスポーツ、体育としてどうあるべきか考えなければならぬと思いました。そして、このことをどのように自校の生徒に伝えようかと考えながらお聴きしていました。前回の64年の東京の時にもオリンピック教育を実施しているようです。今も東京だけではないと思いますが、子供達に観る、支えるということを含めて、オリンピック教育に関わる様々な角度から切り口から子供達にも刺激を与えているところだと思います。また、この歴史は大事なことでありますので、私も一人の教育者として、子供達にこの精神はぶつけていきたいと思っております。真田先生、貴重なご講義を、ありがとうございました。

(本原稿は、第14回研究大会講演音声録音より文字起こししたものである)